

## 2011 年度 事業報告

### 公1事業 がん知識・がん予防の普及啓発活動

#### 【ピンクリボンフェスティバル】

乳がんの早期発見、早期治療の大切さを啓発するイベント、ピンクリボンフェスティバルは、東日本大震災の発生で一時的に開催自体が危ぶまれた。特に被災地の仙台ではスマイルウオークのコースが崩壊するなど厳しい条件だったが、こういう時こそ征圧運動は大切という声が悲観的なムードを打ち消した。

会場も例年通りの東京、神戸、仙台に加え、名古屋が追加され初めての開催となった。全体で41社の企業協賛を得て、事業収入は1億5,280万円（雑収入を含む）となり前年より3%の伸び。

シンポジウムは東京・神戸の2会場で開催。従来は一般向け、患者向けと2部制にしていたが講演内容や受講者が大幅にダブるため、今回から一講演にした。それにより参加者数は両会場で約700人減の1,350人。乳がん啓発の講演、最新治療に関する講演、ゲスト講演、参加者から事前に寄せられた質問に答えるQ&Aコーナーという構成とした。どちらの会場も内容は濃く高い評価を得た。

スマイルウオークは、東京・神戸・仙台・名古屋の4都市で開催。仙台は震災の影響で1コースだけの実施になったこともあり、参加者合計が1,400人減り11,700人となった。会場によってはマンモグラフィ検診車による乳がんの無料検診や、自治体ブースでの検診情報の提供を実施。さらに対がん協会と森永乳業ではオリジナルの無料検診クーポンを配布し、実際に受診へつながるインセンティブを提供した。

#### 【リレー・フォー・ライフ】

がん患者、家族、友人、支援者などが24時間歩いてがん征圧の寄付を募るイベント、リレー・フォー・ライフ。11年度は函館（北海道）、駒沢（東京）、長泉（静岡）、稲沢（愛知）、福井、亀岡（京都）、尾道（広島）、熊本、玉名（熊本）の初開催地9カ所を含め、全国では27カ所の開催となり前年度からは8カ所増となった。

この催しは、ボランティアによる企画・運営が中心で、年間のべ600人を超す実行委員が開催に携わっている。一般の参加者は38,600人を数え前年より2,200人の増。うちサバイバー（がん患者、経験者）の数も2,700人を超えた。終了後に実行委員会から

寄せられる寄付は、東日本大震災があったにもかかわらず昨年度の2,700万円に近づく2,615万円（実行委員会主催の被災地向け義援金を含む）となった。

12年度は現在計画されているものも含め40ヵ所に届きそうな勢いを見せており、この事業の今後の伸びが期待される。

### 【その他のキャンペーン】

#### ①ほほえみ基金

乳がん征圧を目的としたほほえみ基金の活動。検診受診率向上キャンペーンとして協会オリジナルの乳がん検診無料クーポン券を年度全体で15,000枚（対がん協会分10,000枚、森永乳業との提携分5,000枚）を配布した。対がん協会分については5,048人が受診（使用率50.4%）、そのうち459人が要精検（要精検率8.4%）という結果だった。受診者のうち初診は2,249人（41.4%）で、初回受診者を増やすという目的にもかなう結果となった。森永乳業との提携分は使用期限を半年残しているため結果報告は後になる。

また、ほほえみ基金としては公3のがん相談ホットラインの一部の費用負担や、乳がん患者団体向けセミナーの費用なども拠出している。

#### ②子宮頸がん基金

市民を対象にした「母娘で考える女性の健康セミナー」は6月に札幌市で、11月に名古屋市で開催。セミナーを機にそれぞれの地域で学生による運動の立ち上げを企画。北海道対がん協会の支援を受けて北海道リボンムーブメントが誕生した。高校への出前授業も引き続き実施している。

子宮頸がん啓発で重要な若者への啓発では、対がん協会の取り組みは各方面から注目を集め、厚労省の研究班からも連携を求められた。12年2月に横浜市で開催されたイベントではリボンムーブメントの学生たちが内容を決めるなど主導的な役割を果たし、若者からの発信も実現している。

子宮頸がん検診の受診者を対象に10年度から始めたHPVテストの臨床研究事業は11年度には7支部で実施。HPVテストを「併用」した受診者は両年度を合わせて13,000人を超えた。比較可能な対照群をあわせもつ研究として、これほどの人数を集めたものは国内に例がなく、とくに人数の多い岩手や熊本でフォローアップする態勢を組んで「中等度異型性以上」の検出率の把握・分析を進めている。

HPVワクチンの登録に関して厚労省の研究班のメンバーとして参加。金沢医大と石川県内灘町の協力を得て、両者が設置・運営するサーバーを使って、ウェブ上にフォーマットのたたき台を作成した。このため6月には担当者らが専門家らとともにHPVワクチン登録で先行するオーストラリア・メルボルンのシステムを視察した。

### ③がん教育基金

がん教育DVD「がんちゃんの冒険」を希望する中学校には無償で、それ以外は原価で配布した。これまでの制作枚数は25,000枚、そのうち11,000枚をすでに配布した（年度末時点）。中・高や大学の授業等で使われたことはもちろん、CATVでの地域放送や、保健所の講演会、検診の待合室での放映など多角的に活用されている。

併せて学校でがんの授業も実施した。10月に横浜雙葉中学・高等学校の中1～高1生約400名と希望する親を対象に、東大病院の中川恵一准教授が3時間にわたりがんについて分かりやすく解説した。この模様は12月26日の朝日新聞に掲載され、懸賞のDVDプレゼントの応募は4,000人を超えた。

これらを財政的に支えるのは「がん教育基金」で805万円の寄付収入。収入の中心は東京フィルや日本財団が協力してくれている「海の日 チャリティコンサート」の入場料収入。

### ④がん征圧月間の活動

日本医師会と共催で9月を「がん征圧月間」と定め、厚生労働省、文部科学省、47都道府県、19政令指定都市、日本癌学会、日本癌治療学会などの後援を得て全国的に啓発活動を集中して展開した。

中心行事の「がん征圧全国大会」は鹿児島市で9月1～2日に開催。「がん征圧の思い つなげよう薩摩から」をキャッチフレーズとして多彩な催しものを展開。前日行事のシンポジウムは「新しいがん検診のあり方」をテーマに、がん対策推進協議会会長の門田守人氏、宮城県対がん協会の渋谷大助氏、厚生労働省の鷺見学氏らが活発に議論した。当日の大会では朝日がん大賞、日本対がん協会賞の贈賞などに加えて、仁科亜季子さんが記念講演し、1,200人の参加者には好評だった。

### ⑤国際対がん活動と連携した活動

国際対がん連合（UICC）との連携の一環として、UICCが定めた「世界対がんデー」（2月4日）に、UICC日本委員会などと共に、啓発イベントを開催。09年から毎年開いており、12年2月には、日本癌治療学会を主催者に加え、大阪で、公開シンポジウム「がんの痛みからの解放—先進国の水準を目指して—」を開催した。

また、長年、協力関係にあるアメリカ対がん協会（ACS）から、無償で開催ライセンスの提供を受ける「リレー・フォー・ライフ」（RFL）では、日本各地で実施されるRFLの収入の一部がACSの国際対がん活動基金に拠出された。

## 【啓発セミナー】

### ①乳がんセミナー

住友生命、富国生命、日本生命、ヤフーなどの各企業とタイアップした「乳がんセミナー」を全国各地で15回開催した。

### ②全国巡回がんセミナー

6月に高知市（561人参加）、10月に新潟市（350人）、2月に青森市（350人）の3か所で開催した。高知では講師に元プロテニスプレイヤーの杉山愛さんを招き、地元医師とのトークセッションなどを実施し、参加者数は巡回がんセミナーとしてはこれまでで最大の規模となった。

## 【情報発信】

テレビ、新聞などで公共広告を展開するACの支援団体として、前年度に引き続き選ばれ、テレビCMや新聞広告、ポスターなどを制作し各メディアで情報提供した。テーマタイトルは「慢心より、検診」。「まだまだ若いから」とか「タバコを吸っていないから」という理由で検診を受けないことが多い。がん予防の敵はそうした慢心にあるのではと問いかけ、検診を勧めた内容である。

また、全国の各支部の協力を得て、10年度の支部による「がん検診の実施状況」をまとめ300部発行した。支部はもちろん、国、地方の行政などで活用されており、いわばわが国の「がん検診白書」とも呼ばれている。検診の受診者数は胃、子宮、乳房、大腸など全体で10万人を超える減り方を示し受診者総数は1億1,600万人。国の無料クーポンは2年目に入ったが、初年度に比べ広報体制が弱いことなどから、受診率向上に目立った効果は上げていないことなどが分かった。

## 公2事業 専門家・専門団体向けの支援事業

### 【がん総合相談研修プログラム策定事業】

11年度からの厚労省委託事業で、がん患者や家族などのがんに関する身体的、社会的、精神的なさまざまな内容の相談に対応することを目的に、がん患者やその家族が行うピアサポーター（相談員）が身につける基本的スキルの研修を行うための研修プログラムを策定する事業である。策定委員会および作業部会を設け、9月から計8回にわたる審議の結果、研修用テキストなどの素案をまとめた。また、10月23日には、シンポジウム「がんのピアサポートってなに？」を東京・大阪を結んで開催。両会場で約240人の参加があった。年度末には委員長をはじめとする委員会各委員による総括や、委員

会議事録、シンポジウム講演記録などをまとめた事業報告書を作成した。なお、24年度も継続して受託し、研修テキストやDVD作成を予定している。

## 【助成】

### ①若手医師奨学制度

がん治療にあたる若手医師の専門性を高めることを目標に、3カ月または半年の奨学金を提供する事業。11年度は7人に550万円を支給した。選ばれた医師はがん研有明病院、愛知県がんセンターなどで研修を受けた。

また、米テキサス大学MDアンダーソンがんセンターで1年間学んでもらう「マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞」の受賞者は1人増員し、KKR札幌医療センター斗南病院の古川孝広医師、栃木県立がんセンターの原尾美智子医師に決定した。2人は12年6月に渡米し研修に入る。この奨励賞はリレー・フォー・ライフに寄せられた寄付をもとに運営している。

### ②地域連携に支援（地域在宅ケア支援事業）

在宅治療が増える昨今、地域の連携をめざす3件のボランティア組織に各50万円、計150万円を助成した。東京立川の「HOPEプロジェクト」は周辺の在宅支援ネットワークグループや療養施設と連携し、在宅訪問の際にボランティア活動で作製した季節の花を届けた。同じく立川のボランティアグループ「さくら」は生活者の目線を大切にしながら末期の在宅療養支援で訪問サービスを進めた。また高知県仁淀病院の「いの町在宅ボランティア」は支援組織の連携ネットワークを作るなど、町ぐるみの支援組織づくりをめざして活動した。

<助成一覧は巻末表をご参照ください>

## 【研修】

### ①乳房超音波講習会

公益財団法人結核予防会と共催で、2回目となる乳房超音波講習会を開催。2月18～19日に東京都清瀬市の結核予防会結核研究所で実施、48人が参加した。受講生は、JABTS（日本乳腺甲状腺超音波診断会議）の実施する実力評価試験を受けた。

### ②大腸がん検診精度向上研修会

大腸がん検診に携わる医師・検査技師・保健師・看護師を対象に2月24日、東京・有楽町朝日スクエアで3回目となる「大腸がん検診精度向上研修会」を開催した。42人（講師含む）が参加した。

### ③保健師・看護師研修会

がん検診の第一線で働く保健師・看護師等を対象に3月1～2日、東京・有楽町朝日

スクエアで 35 回目となる「保健師・看護師研修会」を開催、全国の支部やその関連団体等より 97 人（講師含む）が参加した。

#### ④診療放射線技師研修会

結核予防会と共催で 3 月 7～8 日、東京都清瀬市にある結核予防会結核研究所で実施、55 人が参加した。

#### ⑤マンモグラフィ撮影技術講習会

マンモグラフィ研修会は、3 月 23～25 日にがん研究会交流センターで開催、49 人が参加した。受講者はマンモグラフィ検診精度管理中央委員会の実施する試験を受け、A 評価、B 評価が計 42 人と好成績だった。

#### 【表彰】

日本対がん協会賞は個人 6 人と 1 団体に贈呈した。受賞者は個人の部が、西山順三（医療法人西山医院理事長）、井出研（神奈川県予防医学協会常務理事）、吉田豊（青森県総合健診センター前理事長）、赤松暁（結核予防会放射線技師協議会顧問）、米盛學（前鹿児島県民総合保健センター理事長）、松崎廉（元長野県医師会消化器検診検討委員長）の各氏。団体の部は、ひまわりの会（群馬県の患者団体）。

また、同賞の特別賞「朝日がん大賞」は 11 回目を迎え、山下俊一氏（福島県立医科大学副学長、長崎大学教授）が選ばれた。

#### 【がん検診車無償貸与事業】

財団法人 JKA 補助により支部に無償貸与していたがん検診車について、各県支部の所有とするため名義変更の手続きを進め 8 月までに全車完了した。

### 公 3 事業 がん患者サポート事業

#### 【無料がん相談事業】

##### ①がん相談ホットライン

現在、相談員は 17 人が対応、11 年度の相談件数は前年度比 103% の 9, 124 件だった。東日本大震災後に設けた被災者向けフリーダイヤルは 4 月～12 月で 94 件だった。

##### ②医師による相談

医師相談は面談、電話とも前年度からの態勢を維持した。全国で合計 531 回（面談 120 回、電話 229 回ほか）にのぼり、1, 687 人の相談に応ずることができた。このうち被災者向けフリーダイヤルは 4 月～12 月で 182 件となった。

### 【患者団体向けセミナー】

乳がんと子宮頸がんの患者、サバイバーを対象に、治療の副作用で生じる美容の悩みに応える美容セミナーを資生堂の協力で開催。朝日スクエアで8月と11月の2回実施した。抗がん剤の副作用で抜けることもある眉毛・まつ毛の描き方、しみやくすみ、色素沈着をカバーする方法などを参加者に知ってもらった。セミナー終了後はお茶会で参加者同士が親睦を深めることもできた。参加者は計13人。

## 公4事業 がん研究支援事業

### 【がん研究の成果の普及啓発や、均てん化を推進する事業】

研究成果普及や啓発、均てん化のための研修会や発表会を、医療従事者・専門家向け、一般向け合わせて31回開催した。このうち「平成23年度がん臨床研究成果発表会（研究者向け）」は1月19日と20日の両日に東京で開催し、66人の研究代表者（一部代理を含む）が成果を発表した。発表内容抄録集は本年度新規採択課題分15件を含め81課題すべてを掲載して作成し、医療水準の均てん化を目的に全国の約400か所のがん診療連携拠点病院や特定機能病院、東京都指定がん診療病院に配布した。

一方、大腸がんの検診と予防のための生活改善をすすめる啓発冊子を、24万部作成し、全国のがん診療連携拠点病院や当協会及びその46支部を通じて配布した。ホームページにもそのデータを掲載し、がんに関する正しい知識を普及させるために役立てている。

## 寄付の概要

寄付は総額で4億3,241万円、対前年比137.2%、同予算比113%

11年度の寄付は初めて4億円の大台を超えた。東日本大震災で被災地へ寄付が集中したにも関わらず40%近い伸びを示したが、これは乳がんのための「ほほえみ基金」の定着と個人からの大口寄付が連続したことが大きい理由だ。個人では米国在住の邦人から1億円、国内で3千万円、1千万円と続いたが、これは震災によって社会貢献の意識が高まった結果とも言える。

震災は「法人寄付」に若干マイナスの影響を見せ、社数は前年の345社から307社（38社減）へと後退し、100万円以上を寄付した企業も前年の47社から38社へと減少した。

なお、在米国邦人からの1億円は本人の意向もあり、当年度ですべては使わず、5年間にわたって活用することとした。1億円のうち2千万円を11年度に使い、あとの8千万円は指定正味財産にして据え置いた。

《一般寄付》2億9,854万円、対予算比147.4%

「個人寄付」は、1千万円を超える大口の3件が貢献して、予算の4千万円を大きく上

回り 1 億 7 千万円、対予算比 425%

「法人寄付」は、ポロ・ラルフローレン、日本イーライリリー、三菱東京 UFJ 銀行、大鵬薬品、アメリカンファミリーなどが貢献して 1 億円、ただし対予算比では 89.2%

「RFL」は 27 会場で開催したが 2,615 万円と予算の 4 千万円に届かず。対予算比 65.4%

「オンライン募金」は新規のマンスリー契約者を伸ばすことができず 197 万円。

《指定寄付》1 億 3,387 万円、対予算比 74.4%

「ほほえみ基金」は、大型の寄付でエイボン・プロダクツ、安定した寄付先のワコール、クレハ、シャルレ、キリンビバレッジなどが貢献し、1 億 1,163 万円、対予算比 93.0%

「がん教育基金」は、教材の DVD「がんちゃんの冒険」が完成し、中学校への無償配布と出前授業を開始。東京、大阪のチャリティコンサートで 549 万円、個人大口寄付 200 万円などで 805 万円、対予算比 40.2%

「子宮頸がん基金」は公費助成によるワクチン接種が始まったものの、特定された寄付先ばかりで他の賛同が得られず低調で 1,220 万円、対予算比 40.4%

「禁煙基金」はようやく厚労省から喫煙率低下の目標が出てきたがまだまだ低調で、個人から 200 万円、対予算比 20%。



2011年度の助成一覧

助成名称	助成内容	応募対象・ 応募数	助成決定先	金額
ほほえみ基 金助成	乳がん検 診機器、 関連設備	全国の住民検 診実施団体  21 団体 23 件	岩手県対がん協会、宮城県対がん 協会、石川県成人病予防センター、 福井県健康管理協会、愛知県健康 づくり振興事業団、京都予防医学 センター、兵庫県健康財団、岡山 県健康づくり財団、徳島県総合健 診センター、香川県総合健診協会、 熊本県総合保健センター 計11件	計 1,006 万円
ほほえみ基 金助成	イ ベ ン ト、企画	全国の乳がん 啓発団体、患 者会  21 団体	いわてピンクリボンの会、ピンク リボン in 郡山実行委員会、くまが やピンクリボンの会、さくらの会、 奈良ピンクリボンアピール、徳島 乳がんネットワーク、ピンクリボ ン愛媛協議会、いぶき会、ピンク リボン活動宮崎、ぴんく・ぱんさ あ 計 10 件	計 100 万円 (1件 10 万円)
奨学金助成	がん専門 病院で研 修のため の奨学金	若手がん専門 医  7 人	山下美智子、松村優、川瀬史愛、 阿曾沼邦央、長谷川俊之、大林友 彦、品川秋秀各医師。 計 7 人	計 550 万円 100 万円×4 人 50 万円×3 人
マイ・オン コロジー・ ドリーム 奨励賞	米国テキ サス大学 MDACC で研修	若手がん専門 医  4 人	KKR 札幌医療センター斗南病院 古川孝広医師 栃木がんセンター 原尾美智子医師 計 2 人	100 万円×2 人 + 交通費
地域ボラン ティアの組 織化	がん患者 支援のボ ランティア 活動	全国のボラン ティア組織  3 件	特定非営利活動法人「HOPE プロ ジェクト」(代表 桜井なおみ) 高知県の町ボランティア支援ネ ット(代表 松浦喜美夫) ボランティアグループ「さくら」 (代表 中村克久) 計 3 件	計 150 万円 (1件 50 万円)

上記は「助成対象の審査に関する規程」に則り、日本対がん協会の助成審査委員会（委員長は理事長）で審議され決定した助成の一覧。